

移植、出穂、結実、収穫、脱穀、計量の実際から、稲作儀礼、水田の動植物にいたるまで、きわめて具体的かつ詳細な記述がなされており、さながら「水稻耕作百科」の観を呈している。

本訳書には、タイ国になじみの薄い読者の理解を助けるため、各章末尾に、詳細にすぎるほどの訳註と説明写真が加えられている。とくに巻末に付された62葉の参考写真は、原文はもとより、英訳にもなかったものであって、本訳書の価値を高からしめている。

これまでタイ語文献でわが国に翻訳紹介されたものは、若干の小説をのぞき、ほとんど皆無の状況であったが、アジア・アフリカ言語文化研究所の手によって、本訳書のような、タイ人学者による研究業績が全訳刊行されたことは、まことに喜ばしいことである。同研究所によって今後、アジア・アフリカ諸国語で書かれた研究書が、系統的に翻訳紹介されることを期待したい。(石井米雄)

J. Marvin Brown, ed. *AUA Language Center Thai Course*, Book 2. Bangkok: The American University Alumni Association Language Center, 1966. 131p.

先に紹介した *AUA Language Center Thai Course*, Book 1 に直接続くものである。全体で20のレッスンより成り、各レッスンに費やすべき時間数は、教室での練習2時間に L.L. での練習1時間となっている。また、L.L. を使用出来ない者は、これを省略し50時間で本書を終えてもさしつかえないように工夫されている。各レッスンは、(1) Tone Practice, (2) Expansions, (3) Patterns, (4) Dialogue, (5) Contrast Drills, (6) Tone Identification Drills, (7) Taped Drills の7部分に分かれており、(7)が L.L. での訓練に当てられるわけである。全体を通じて、各部分にはいろいろな名前がつけられてはいるが、すべてパターンによる反復練習の方法が取られている。したがって、一語一語訳してからもう1度全体の意味を考えるとというような行き方は、Book 1 および Book 2 を通じて全然見られない。前半のタイ語には訳がつけられ

ているが、それも後半になると全くなくなる。本書を終了した場合どの程度のタイ語の力を身につけたことになるかという点であるが、わたくしは本書にある文章を本当に身につけてしまえば、普通の日常の話し言葉では、まず困ることはないと思う。本書のタイ語は純粹の話し言葉ばかりであり、その話し言葉の文もすべてもれなく集められているわけではないが、まずこれだけの口語をものにしておけば、必要に応じてそれを自分で拡大増加させることはたいてい困難ではないと思う。またタイ文字の使用法については、本書の性格上、各レッスンの末に少しずつ例をあげて説明しているだけであるが、それでも Book 2 を終えれば、最少限の知識は得られるであろう。だいたい本書はタイ語の完成を目ざすものではなくて、基礎的な話し言葉を能率よく身につけさせ、その基礎の上に各人の必要なり興味なりに応じて、さらに高度の能力を積み重ねてゆくことを予想するものである。ただ本書は AUA におけるタイ語コースにおいて、AUA の方法によりタイ語を学ぶという具体的な線にそって作られたものであるから、誰がどんな方法で用いても効果が上がるというようなものではない。まず、独学は不可能であろう。本書が予想している方法を心得た指導者の下に適当なインフォーマントを使用して授業を進めれば、かなり労少なくして効果を上げることが出来るのではないかと思う。いったいに本書ではこの「労少なくして」という点が重んじられているといえる。だから、その「労少なくして」得られる以上のことを本書から予期してはアテがはずれるであろう。

(桂満希郎)

L.M. Hanks, J.R. Hanks and Lauriston Sharp. *Ethnic Notes on Northern Thailand*, Data Paper No. 58. Ithaca: Southeast Asia Program, Department of Asian Studies, Cornell University, 1965. xiii + 96 + 13p

1963年より1964年にかけて行なわれた Benington-Cornell Anthropological Survey of Northern Thailand に参加あるいは何らかの形で関係した研究者達のペーパーを集めたものである。全部で

12のペーパー、ビブリオグラフィーおよびタイ語用語のグロッサリーから成るが、今までにあまり名の知られていない若い研究者のペーパーも取り入れられている点が興味深い。ただ、この少ないページ数で12のペーパーを集めているのであるから、どれもみな短いものばかりで、取りあげられているテーマも小さいもので、かなり概括的である。しかし多いようで案外すくない北タイに関する研究書で、しかもタイ人以外の ethnic groups についてのペーパーが半数以上の7編を占めているのであるから、この地域の研究者にとっては、やはり興味をそそるものだといえよう。12のうち言語に関するものは、(1) R. B. Jones, “Phonological Features of Northern Thai” および (2) Herbert C. Purnell, Jr., “Two Grammatical Features of Northern Thai” とであり、いずれも北タイ方言 (N.T.) をテーマとしたものである。わたくしは他の分野のペーパーに関してどうこう言う資格はないので、以下、この二つのペーパーに話を限りたいと思う。

(1) は全部で5ページであるが、取りあげられている言語は Prae, Lamphun, Chiangmai, Chiangsaen, Nan, Bandu, Chiangrai の七つの北部方言および中部方言 (C.T.) である。著者の目的は、N.T. の中でもこれらの各小方言は互いに異なりながらも、C.T. にはないある共通した点を持っており、これが N.T. と C.T. とを分かつ要素であることを、簡略に示そうという点にあると思われる。このペーパーでは initial consonants と tones とに関して、以上の七つの N.T. と C.T. とを比較したものである。全体として別にこれと言って新しいものはないが、その目ざしている点はひじょうに興味の持てるものだと思う。例えば、N.T. と C.T. とのバウンダリーをどの辺に引くかといったような問題になると、さらに多くのこの種のデータが必要になってくるのではなかろうか。著者もふれているように、Uttaradit, Pitsanulok あたりの方言についてこのようなデータを得ればおもしろいのではないかと思う。これから N.T. に関して field work を行なうならば、どこか一つの地にとどまってその方言の極めて詳しい記述研究を行なうか、あるいはひじょうに多くの地点を選んでそれぞれの方言を他と異ならしめている要素を明らかにしてゆくか、

この二つの線にそって行なうことになると思うが、本ペーパーは後者の行き方を進めるための出発点を示すものだと思う。

(2) は N.T. (Chiangrai, Maechan District) のと C.T. との文法構造を対照したもので、いわゆる比較言語学的研究ではなくて、両方言の “contrastive study” と言うべきものである。全体で6ページ近いものであるから、両方言の文法構造全体を対照したものではなく、compounds および unrestricted intensifiers (e.g. /...càt, nák, etc.) における語順を対照している。compounds については /náam/ <水> および /càat-/ <ひじょうに、実に> (N.T.) について、これらが他の語と結合して compounds を構成する際の語順を対照する。例えば N.T. /náammê-/ <河> : C.T. /mêenám/. unrestricted intensifiers は、かなり数が多いのでここにあげることは出来ないが、同じような方法で C.T. との違いを、語順だけでなく semantic shift に関しても、浮きぼりにしている。このペーパーは以上の2点に関してのみ両方言を対照したものであるが、文法構造全体の対照研究の行なわれることが望まれる。N.T. のどれか一つを C.T. と比較する場合、音声構造のみを比較することは、現代では、あまり意味がないとわたくしは思うが、この種の文法的な対照となると、今までにまとまったものがないだけに、N.T. の field worker にとってたいへんおもしろい研究になるのではないだろうか。

(桂満希郎)

Ratchabanditsathan, ed. *Khwamru thang Aksorasat*. Bangkok: Ratchabanditsathan, B.E. 2508 (1965). 5+321p.

本書はタイ国王立研究所 (Royal Academy) がこれまでに発行したことのある、主としてタイ語に関する論文および告示の類から、適当なものを選び新たに1冊の本にまとめて出版したものである。したがって、各文の初版年代はかなり古いものばかりであるが、その内容を見ると、タイ語に関心ある人達にとってまだその価値をうしなわないものばかりである。これら一つ一つの出版物が現在では入手不